

資料

自己認知と自己評価の関係**

—重みづけをした理想自己と現実自己の差異スコアからの検討—

遠藤由美*

PERSONALIZED STANDARD OF SELF-ESTEEM

Yumi ENDO

Traditionally, discrepancies between positive ideal-self and real-self have been associated with low self-esteem. The basic idea of general positiveness of real-self is considered an index of self-esteem. But Rosenberg (1965) emphasized two different meanings, that is, 'good enough' and 'very good' being involved in self-esteem. His self-esteem scale favored the former. In the present study, it was hypothesized that not a general positiveness, but a personalized positiveness together with a non-negativeness were correlated with self-esteem (Rosenberg). Personalized standard were defined as high rating scores of positive and negative ideal selves. The results of the present study supported the hypothesis, especially in a negative ideal-self. It was suggested that self-esteem was more a function of distance how far I am from the person who I won't to be.

Key words : personalized standard, self-esteem, positive ideal-self, negative ideal-self, real-self.

自尊感情については多くの考え方がある (e.g. Cooper-smith, 1967; Rosenberg, 1965) が、一般に自分をポジティブな存在であると思うことについてはコンセンサスが成立している。自己に対する全体としてポジティブな評価感情は当然ポジティブな自己認知と結びついている。しかし、全体的自己評価は個々の点に関する自己認知の感情価の単純な加算モデルでは説明できない。事実、自分をポジティブな特性で記述しても自尊感情の高さとは必ずしも有意な相関は見られない (Moretti & Higgins, 1990), という指摘がある。自尊感情が個々の自己認知とは別の構成体として直接測定する試みがこれまでなされてきた理由はここにある。そこで、どのような点で自己をポジティブに認知すれば、自尊感情の高さと結びつくのかを解き明かすことが求められる。

この点に関して、Wylie (1974) が全体的自己評価に関連する度合いが強い側面とそれほど強くない側面とがあることを指摘し、梶田 (1988) も自己評価に関わる関連度の強い側面のことを『自尊心をささえる根』ということばで表現するなど、すでに多くの研究者が自己認知の諸側面の重みづけの問題として注目してきた。また、Kokenes (1974), Harter (1982), Hormuth (1990), 山本ら (1982) などの実証的研究によって、自己評価と関わりの深い領域が特定されてきている。たとえば、山本ら (1982) は大学生を対象にした調査から、“優しさ”や“容貌”などに関する次元での自己認知と自己評価が密接に関わっていると報告している。

ところで、Rosenberg (1965) は自尊感情には2つの異なる内包的意味があるとし、自分を「とてもよい (very good)」と考える場合と「これでよい (good enough)」と考える場合とを区別する必要があることを指摘している。前者は優越性や完全性の感情と関連し、

* 上越教育大学 (Joetsu University of Education)

** 本研究は平成2年度文部省科学研究費補助金一般研究(C) (課題番号02610039) によっておこなわれたものの一部である。

他者との比較において自分のほうが優れていると認知すること、そしてまた他者からもそのように認められていると思うことである。これに対して後者は、仮に自分が平均的な人間であり、自分の欠点にも十分に気づいているとしても、自分の設定した基準に照らして「これでよい」として自分を受容し、好意を抱いていることである、としている。「これでよい」という意味での自尊感情には優越性や完全性は含まれない(Rosenberg, 1986)。彼自身は後者の考えを採用している。

このような自尊感情の2つの意味はそれぞれ自己を評価する際に用いている基準が異なっていることから生じた、と考えられる。「これでよい」意味の自尊感情は、Rosenberg (1965) が述べているように、個人の基準に照らした評価感情である。つまり、この場合の基準は個々人によって異なる極めて個性化された (personalized) ものであり、その個人だけに所属する価値体系である。他方、「とてもよい」という意味での自尊感情においてもやはり個性化された基準が用いられることは考えられよう。しかし、これが完全性や他者に対する優越性を含むとすれば、より積極的に自己を肯定し、しかもその肯定感情が安定的であるためには、その個人が所属する社会での文化によって認められている基準が重視されることになり、したがって自分なりの基準が担う役割は社会的文化的な基準に比べて相対的に低いと思われる。

前述した自己認知の側面と自尊感情との関係についての研究は、年齢や性別、ライフ・ステージなどある属性を共有する人々全体においてどのような側面の自己認知が自尊感情に強く関わっている傾向にあるかを示した。このような研究は理想自己という極めて個人的な基準を扱っているようにみえながら、実際は集団の全体的傾向を問題にしたものであり、社会的なコンセンサスのある基準を反映している可能性がある。先に紹介した山本ら (1982) の研究結果を例にあげるならば、大学生という集団全体でみると優しさ次元を重んじ、自らを優しいと認知していることが自尊感情の高さと関連しているということである。しかし Rosenberg (1965) の主張するように、「これでよい」という意味での自尊感情は個性化された基準に照らして判断されるものであり、優しさ次元を重要視しない個人がいるならば、その人の自尊感情は優しさ次元の自己認知とは比較的関わりが薄く、むしろその人が重要視している次元で自己をどう捉えているかということのほうに関わりが強いと思われる。

自己評価基準として自分自身が持っている価値や理

想目標に注目している研究者は、Rosenberg (1965) の他にも、James (1890), Markus ら (1986) などがあげられる。また、自尊感情維持モデルを提唱している Tesser (1980) は自己評価に関わるものとして「他者の遂行」「他者との心理的距離」と並んで「課題への関与度」の要因を挙げ、個人がその課題遂行をいかに重要視しているかが自己評価に影響することを示唆している。しかし、自己認知と自己評価の関係に関する研究において、個性化された基準に照準をあてた報告はこれまでほとんど見られない。

近年、主として社会認知心理学の領域では、主体的人間観を基盤に、人間の自己形成的側面を個人の目標や関心に焦点をあてて解明していこうとする機運が高まっている。そうした中で、Higgins (1987) は個性記述的 (idiographic) 視点を導入し、自己評価基準としての理想自己を再吟味している。彼の (self-discrepancy) 理論はその名が示すとおり、理想自己と現実自己の差異に注目しており、差異スコアを自尊感情の指標とする従来の研究と類似しているように見える。しかし、それまでの研究が個人の差異の数量的側面や被験者全体において重視される領域を問題としたのに対して、self-discrepancy 理論では個々人によって動機づけられる領域が異なっており、ゴールとしての理想自己もその内容や構造に個人差があることを前提としている点で大きな違いがある。

そして実際、個々人が主体的に理想として定めている領域を取り上げて検討している。Moretti & Higgins (1990) は個性化された基準としての理想自己に照らした現実自己の位置づけが自己評価に関連すると考えた。そして、各個人の理想自己と現実自己の特徴を自由に記述させ、その特性語が互いに同義語か反意語か無関連かを研究者が判定することによって差異を算出する方法 (これは、分析対象となる項目が個人ごとに異なり、個人差を反映させるという意味で「個性記述的方法」と呼ばれている) を用いて、自尊感情との関係を検討した。彼らはまた同時に評定項目全てを用いた総計としての差異スコアという従来の方法 (これは、全被験者に全く同じ項目を対象し、個人差よりも全体的傾向に焦点をあてており、「法則定立的方法」と呼ばれている) と自尊感情との関連についても検討している。その結果、法則定立的方法における差異スコアでは自尊感情得点との間に有意な関係は見いだせなかったのに対して、個性記述的方法による差異スコアでは有意な関係が見られたことを明らかにしている。

これまで数多くの研究において理想自己と現実自己

の差異スコアが用いられてきており、その算出方法もいくつか報告されている (Hoge & McCarthy, 1983)。しかしながら、いずれの報告においても先に述べた法則定立的方法であって、被験者それぞれの個人にとっての重要性という視点を組み込んだのは Moretti ら (1990) が初めてであった。彼らが用いたこの方法では、しかし、生成された語の対が同義語か否かの判断においては辞書に基づいた一般的意味によって判断されるため、語に対して個人が持っているニュアンスを把握できていない可能性があり、また語彙の豊富さといった他の要因の影響も受けやすい。さらに、日本人は自己の特徴を自由に記述することを求めても、十分な反応数を得られない (Markus & Kitayama, 1991)、という報告もある。したがって、実験者があらかじめ全被験者に自己認知に関する同じ項目を用意した上で、各個人にとっての重要性が反映されるような方法を開発し、検討しなければならない。

他方、遠藤 (1992) は新たにネガティブ側面から自己認知と自己評価の関係を探る必要性を主張し、“かくありたくない”という負の理想自己のほうが“かくありたい”という正の理想自己より自己評価基準として重要な意味を持つことを示唆している。すなわち、かくありたくない人間にいかになっていないかということが自尊感情を強く支えている、というわけである。しかし、Moretti ら (1990) の研究においては理想自己はかくありたい自己という正の方向からのみ捉えられており、このような負の理想自己に関連する視点は含まれていない。したがって、負の理想自己と正の理想自己とを区別した上で個性化された基準という視点を加味することが必要となる。

本研究では自己認知項目に対する正、負の理想自己評定を基に、個々人の正、負の理想自己の重要な次元というものを定め、そこでの自己認知が自己評価に強く関わっていることを明らかにすることを目的とする。具体的には、個人にとっての重要性 (重要/非重要) と差異スコアのタイプ (正の理想自己-現実自己/負の理想自己-現実自己) の組み合わせによる 4 変数が自尊感情とどのように関わっているか検討する。正負の理想自己評定において高い値を得た項目をその個人にとっての重要な項目とすると、そこでの差異スコアは個人にとって重要でない領域での差異スコアよりも自己評価感情に強く関わっていると考えられる。

本研究における作業仮説は次の 2 点である。

①個人にとって重要な項目における正の理想自己と現実自己の差異スコアは自尊感情得点と強い負の相関

関係にあるが、個人にとって重要でない項目においては相関関係は弱い。

②個人にとって重要な項目における負の理想自己と現実自己の差異スコアは自尊感情と強い正の相関関係にあるが、個人にとって重要でない項目においては相関関係は弱い。

また、③として、個人にとって重要な項目において正、負の理想自己のいずれが自己評価基準として強く関わっているかについて検討する。

方 法***

被験者 反応に記入もれのあるもの、全体に同じ評定値を記入しているもの 9 名を除き、大学生 110 名 (男子 42 名、女子 68 名) が被験者とされた。

手 続 (1)自己認知 大学院生 32 名に対して、自己認知に関係すると思われるポジティブ項目 (以下、P 項目と呼ぶ) とネガティブ項目 (以下、N 項目と呼ぶ) を山本ら (1982) を参考にしながら、学業・仕事、家族関係、その他の人間関係、パーソナリティ、ライフスタイル、資産・物質、身体の 7 領域にわたり作成するように求めた。収集された 89 項目の中から、内容の重なりや領域ごとの項目数のバランスなどを考慮して最終的に P、N 項目をそれぞれ 25 項目ずつ合計 50 項目選択した。

正の理想自己：「あなたは次の項目があらわすような人間にどの程度なりたいと思いますか」という教示のもとに、P 項目 25 個をランダムに並べ、それぞれ「ともなりたい(5)」から「なりたいとは思わない(1)」までの 5 件法で評定を求めた。

負の理想自己：「あなたは次の項目があらわすような人間にどの程度なりたくないと思いますか」という教示のもとに、N 項目 25 個をランダムに並べ、それぞれ「絶対なりたくない(5)」から「なりたくないとは思わない(1)」までの 5 件法で評定を求めた。

現実自己：「次の各項目について、どの程度あなたにあてはまると思いますか」という教示のもとに、P、N 項目合計 50 個をランダムに並べ、「よくあてはまる(5)」から「まったくあてはまらない(1)」までの 5 件法で評定を求めた。

自尊感情尺度は、Rosenberg (1965) の self-esteem スケールの翻訳版 (星野, 1970) を用いた。5 件法による評定値の合計をもって自尊感情得点 (SE) とした。平均値は 29.67、標準偏差は 7.18 であった。また男女別では、男子の平均値 31.10、標準偏差 7.54 であり、女子では平

*** これは遠藤 (1992) と同じ方法を用い、同じ被験者から得た資料に基づいている。

均値28.80, 標準偏差6.81であった。したがって, SE において性差はみられなかった ($t=1.63, df=108, ns$)。

なお, 調査は少人数ずつ十数回にわたり実施した。

結 果

(1) 重みづけをした差異スコアと自尊感情との関係

正, 負の理想自己については5段階評定を用いたが, 各評定値の平均度数および割合は評定値5の場合が最も多く, 大きいほうから順次減している。正の理想自己評定の全反応のうち評定値5の場合の反応は50%を超え, 負の理想自己においてもほぼ同様であった。そこで, いずれも5段階評定反応で評定値5をつけた項目をその個人の正, 負の理想自己において重要な項目とし, 評定値が4以下の項目をその個人の正, 負の理想自己において重要でない項目とみなすことにする。

①相関 まず各被験者ごとに正の理想自己評定において評定値5をつけた項目を選んで個人にとって重要な項目とし, それらの項目における現実自己評定値と理想自己評定(5)との差異スコア(これをDpiとする)を

$$Dpi = \sqrt{\frac{\sum d_{pi}^2}{n_{pi}}} \quad (\text{ただし, 個々の項目における差異を } d_{pi} \text{ とし,}$$

個人にとって重要な項目数を n_{pi} とする) の式により求めた。また, 正の理想自己評定において評定値が4以下の項目における理想自己評定値と現実自己評定値との差異

$$\text{スコア(これを } Dpo \text{ とする)を } Dpo = \sqrt{\frac{\sum d_{po}^2}{n_{po}}} \quad (\text{ただし,}$$

個々の項目における差異を d_{po} とし, 個人にとって重要でない項目の数を n_{po} とする) の式により求めた。そして Dpi, Dpo と SE の相関を算出したところ, Dpi では $r = -.389$ ($p < .01$), Dpo では $r = -.305$ ($p < .01$) となった。すなわち予測どおり, 個人にとって重要な項目における正の理想自己と現実自己の差異スコアは自尊感情得点と有意な負の相関関係にあった。個人にとって重要でない項目においても有意な負の相関関係が見られた。2つの相関係数には有意差が見られなかったものの, 個人にとって重要な項目のほうが相関係数の値は大きい。

N項目を用いた負の理想自己と現実自己の差異スコアと自尊感情との関係を検討するため, 正の理想自己の場合と同様に, 各被験者ごとに評定値が5の項目を個人にとって重要な項目, それ以外を重要でない項目として差異スコア(それぞれ Dni, Dno とする)を求めた。そして SE との相関を算出したところ, Dni では $r = .501$ ($p < .01$), Dno では $r = .160$ (ns) となった。すなわち予測どおり, 個人にとって重要な項目における負の理想自己と現実自己の差異スコアは自尊感情得点と

有意な正の相関関係にあったが, 個人にとって重要でない項目においては相関は有意水準に達しなかった。これら差異スコアと自尊感情との関係に関する結果を整理したのが, TABLE 1 である。なお, この表には, 参考までに, 従来の研究と同様の方法で理想自己と現実自己の差異の全項目総計を求めた (P, N項目それぞれを Dp, Dn とする) 場合における自尊感情との相関を遠藤 (1992) から引用し, 併記してある。

TABLE 1 Discrepancy-score と自尊感情の関係

	相 関	相 関	偏相関	重回帰 β 係数
Dp	-.297			
Dn	.360			
Rosenberg	Dpi	-.389**	-.271**	-.094
自尊感情	Dpo	-.305**	-.099	-.113
	Dni	.501**	.504***	.410***
	Dno	.160	.172	.146*

note 1: *** $p < .001$ ** $p < .01$ * $p < .05$ + $p < .1$

note 2: Dp, Dn のデータは遠藤 (1992) からの引用

この表から見てとれるように, P, N項目とも個人にとって重要な項目での差異スコアは個人にとって重要でない項目における差異スコアよりも自尊感情との相関が強い。また, P, N項目とも全項目を用いた差異スコアと比較して, 重みづけられた項目のほうが自尊感情との相関が強い (P項目で $t=1.73, df=107, p < .1$; N項目で $t=2.35, df=107, p < .05$)。このことから, 自尊感情との関わりは, 理想自己と現実自己との差異の全体的水準よりもむしろ, その個人の理想と密接に関わる項目における現実自己との差異の水準であることが示唆された。

②偏相関 P, N項目とも個人にとって重要な項目と重要でない項目においては前者のほうが SE との相関係数は大きかった。しかし, 個人にとって重要な項目と重要でない項目における差異スコアは同一被験者内のスコアであることから, 両者の間に対応のあることが考えられる。事実両者の相関を求めたところ, P項目では $r = .594$ ($p < .01$), N項目では $r = .023$ (ns) となり, P項目で強い相関が得られた。そこで, 相互に統制した偏相関を求めたところ, それぞれ Dpi で $r = -.271$ ($p < .01$), Dpo で $r = -.099$ (ns), Dni で $r = .504$ ($p < .01$), Dno で $r = .172$ (ns) となった。つまり, 個人の理想と関連が希薄な項目においては差異スコアと自尊感情との関係は有意水準に達しない。これに対して, その個人の理想と強く関わる項目において

は差異スコアは自尊感情と有意な関係がある。

③重回帰分析 これまではポジティブ、ネガティブ側面それぞれにおいて個人にとって重要な項目での差異スコアが自尊感情と強い関わりのあることを示してきた。ここでは、4つの差異スコアすべてにおいてどの変数が最も自尊感情を説明するかを検討する。4つの差異スコアを説明変数にし、自尊感情を基準変数にして、重回帰分析をおこなったところ、標準偏回帰係数はDniで $\beta = .410$ ($F=18.35, p<.001$)となり高水準で有意であった。Dnoでは $\beta = .146$ ($F=3.09, p<.1$)で有意傾向が見られた。Dpiでは $\beta = -.094$ ($F=.70, ns$)、Dpoでは $\beta = -.113$ ($F=.27, ns$)となり、ともに有意とはいえない。したがって、4変数において最も自尊感情を強く説明するのは、個人にとって重要な項目における負の理想自己と現実自己の差異スコアがあることが示された。なお、説明率 (R^2) は.55と高水準に達した。

(2) 高自尊感情群と低自尊感情群の差異スコアの分析

個人にとって重要な項目における差異スコアが自尊感情と強く関連し、個人にとって重要でない項目におけるそれは弱いのであれば、自尊感情得点とDpi/Dpo, Dni/Dnoの間にそれぞれ交互作用が考えられる。すなわち、個人にとって重要な項目における差異スコアは自尊感情の高さによって異なるが、個人にとって重要でない項目においては高自尊感情群と低自尊感情群の差異スコア間に有意な違いがないことが考えられる。この予測について検討するため、自尊感情得点順に被験者を並べて上位約3分の1 ($SE \geq 33, n=38$)を高自尊感情(Hi-SE)群、下位約3分の1 ($SE \leq 26, n=38$)を低自尊感情(Lo-SE)群とした。平均自尊感情得点はHi-SE群で37.36(標準偏差3.92)、Lo-SE群で22.00(3.66)であり、両群の差は有意であった($t=17.42, p<.001$)。

Hi-SE群とLo-SE群におけるDpi/Dpo, Dni/Dnoスコアを算出したところ、平均値と標準偏差はTABLE 2のようになった。P, N項目別に自尊感情得点(Hi-SE/Lo-SE)と個人にとっての重要性(i/o)の2要因分散分析をおこなった。P項目では、自尊感情得点の主効果($F(1,74)=25.94, p<.01$)と個人にとっての重要性の主効果($F(1,74)=54.16, p<.01$)がともに有意であったが、予想された交互作用はみられなかった($F(1,74)=.40, ns$)。しかしN項目では、自尊感情得点の主効果($F(1,74)=40.97, p<.01$)と個人にとっての重要性の主効果($F(1,74)=415.44, p<.01$)に加えて、交互作用も有意であった($F(1,74)=13.87, p<.01$)。そこで、個人にとっての重要さごとに

分けて分析したところ、個人にとって重要な項目ではHi-SE群とLo-SE群の差異スコア間に有意な差がみられた($F(1,74)=44.76, p<.01$)が、個人にとって重要でない項目では両者間には有意差はなかった($F(1,74)=2.24, ns$)。したがって、N項目では予測が支持された。

TABLE 2 高自尊感情群と低自尊感情群の
Discrepancy-scoreの平均値

	Dpi	Dpo	Dni	Dno
Hi-SE群	1.52(.44)	1.18(.40)	3.21(.34)	1.53(.36)
Lo-SE群	1.97(.35)	1.57(.47)	2.56(.48)	1.40(.40)

()内は標準偏差

考 察

本研究では、個人にとって重要な点での自己認知は全体的自己評価と強い関わりを持つことを検証することを目的とした。正、負の理想自己評定において高い評定値を得た項目を個人にとって重要な項目、その他の項目を個人にとって重要でない項目とみなし、それぞれにおける正、負の理想自己と現実自己の差異スコアと自尊感情得点との関係を検討したところ、個人にとって重要な項目では差異スコアと自尊感情得点の間に強い相関関係が見いだされたのに対して、個人にとって重要でない項目では相関関係がほとんどなかった。個人にとって重要な項目での差異スコアと自尊感情との相関は、全項目を用いた差異スコアの場合よりも強かった。また、重回帰による4変数の分析は、特に個人にとって重要な項目における負の理想自己と現実自己の差異スコアが自尊感情を最も説明することが見いだされた。

理想自己と現実自己の差異スコアから自己評価感情や適応を捉えようとした従来の研究では、理想自己を自己評価基準として考えていたが、研究者が設定した項目全体において、現実に認知された自己がどの程度理想自己から掛け離れているかという数量的指標が用いられていた。そこでは、それぞれの項目が個人にとっていかなる意味を持つものかはほとんど考慮されなかった。つまり、理想自己と現実自己がたとえば数換算して2離れていたとすると、個人にとって極めて重要な項目で2離れている場合も、個人にとって重要でない項目で2離れている場合も同等の重みを持つものと暗に仮定され、差異スコアは総計で表わされていたのである。本研究の結果において、項目全体の差異ス

コアと個人にとって重要な項目における差異スコアとでは後者のほうが自尊感情と強い関わりのあることが見いだされた。項目全体の差異スコアは個人にとって重要でない項目をも含んでいるため、自尊感情との関わりが弱まるものと思われる。

これまでなされた差異スコアと適応の関係に関する研究では有意な関係を見いだしているものと見いだしていないものがあり結果が必ずしも一貫していない(遠藤, 1991)が、このように個人にとって重要性を考慮していなかったことが一因であると考えられる。一歩進めていけば、従来の研究で必ずしも一貫した結果が得られなかったのは、理想自己を自己評価基準として考えることの妥当性の問題(Hoge & McCarthy, 1983)ではなく、むしろ理想自己の内容上の個人差に対する認識とそれに対応する測定方法の問題であることが示唆される。

本研究の結果から、正の理想自己とともに負の理想自己においても、個人にとって重要な次元での自己認知が全体的自己評価に強く関わっていることが示唆された。ある人がポジティブ語を用いて現実の自己の特徴を語ったとしてもそれがその人にとっての正の理想自己に深く関わるものでなければ、その人の自己評価が高いことを示唆するものではない。また同様に、ある人がネガティブ語を用いて現実の自己の特徴を語ったとしてもそれがその人にとっての負の理想自己に深く関わるものでなければ、その人の自己評価が低いことを意味するものではない。いいかえれば、現実自己の特徴の中には特に自己評価に強く関わるものがあり、それはその人がどのような理想の自己像を描いているかによって規定される、ということである。

もちろん、人間が社会的存在であることを考えれば、正・負の理想自己の内容が他の人のそれと全く重なりを持たないことは稀であって、ある程度の共有が成立しているからこそ自己が安定性を維持できることは否めない。また Erikson (1959) のモデルに示されているように、人にはライフ・ステージごとに直面する重要な課題があり、それは同じ段階にいる人々に共有されているものかもしれない。そうではあっても、自己研究は個々人の固有性を尊重した上で、その認識の構造や機能の普遍性や法則性を解明すべきであろう。

重回帰分析の結果は、さらに負の理想自己と現実自己の重要項目における差異スコアが自尊感情をより強く説明することを示した。このことは、一般に「ネガティブ側面に対する関心が強い」といわれている日本人の自我のあり方とも符合している。先に遠藤(1992)

はポジティブ側面と独立させてネガティブ側面からも自己認知と自己評価の関係を検討することの必要性を説いたが、負の理想自己と現実自己の差異は自己に対する評価感情にもたらす意味において、正の理想自己と現実自己の差異とは異なるものであることが改めて示された。つまり、個人にとっては同じように重要であっても、「是非なりたいたいと思っている人間に現実にかかっているか」ということよりも、「絶対なりたくないと思っている人間に現実にかかっているか」ということのほうが自己評価感情を強く支えていることが示唆される。

自己教育力や自己概念の教育が志向すべき目標のひとつとして、一般には自分自身のあるべき姿、目指すべき姿について、はっきりした方向性のあるイメージを形成することがあげられている(梶田, 1985)。つまり、正の理想自己を明確にすることの重要性がこれまで指摘されてきたが、本研究の結果から、「かくはなりたくない」自己の姿を明確にすることの必要性も示唆される。負の理想自己に照らして現実の自己はそうではないと否定することは、決して「積極的自己肯定」とはいえないが、自己に対して肯定的評価感情を持つためのひとつの方法ではあると思われる。自己評価基準としての正の理想自己と負の理想自己の類同相違や関連についてはさらに検討を要するが、いずれにせよ、ここでいえるのは、各個人の理想を様々な方向に全体的に高めるのではなく、むしろ何を大切にしたいか、どのような人間を志向するのか、そしてまたどのような人間になることを回避したいのかについて、個々人が自分なりのイメージを明確にし、精緻なものにすることが重要だということであろう。

引用文献

- Coopersmith, S. 1967 *The antecedents of self-esteem*. San Francisco : W.H. Freeman and co.
- 遠藤由美 1991 理想自己に関する最近の研究動向—自己概念と適応との関連で— 上越教育大学研究紀要, 10, 19—36.
- 遠藤由美 1992 自己評価基準としての負の理想自己 心理学研究 (印刷中)
- Erikson, E.H. 1959 *Identity and the Life cycle*. International University Press. 小此木啓吾 (訳) 1973 自我同一性 誠信書房
- Harter, S. 1982 The perceived competence scale for children. *Child Development*, 53, 87—97.

- Higgins, E.T. Self-discrepancy : A theory relating self and affect. *Psychological Review*, **94**, 319—340.
- Hoge, D.R. & McCarthy, J.D. 1983 Issues of validity and reliability in the use of real-ideal discrepancy scores to measure self-regard. *Journal of Personality and Social Psychology*, **44**, 1097—1109.
- Hormuth, S.E. 1990 *The ecology of the self : Reflection and self-concept change*. Cambridge University Press : Cambridge.
- 星野 命 1970 感情の心理と教育(二) 児童心理, **8**, 161—193.
- James, W. 1890 *Principles of Psychology*. New York : Henry Holt.
- 梶田叡一 1985 子どもの自己概念と教育 東京大学出版会
- 梶田叡一 1988 自己意識の心理学(第2版) 東京大学出版会
- 加藤隆勝 1977 青年期における自己意識の構造 心理学モノグラフ 東京大学出版会
- Kokenes, B. 1979 Grade level differences in factors of self-esteem. *Developmental Psychology*, **10**, 954—958.
- Markus, H. & Kitayama, S. 1991 Culture and the self : Implications for cognition and motivation. *Psychological Review*, **98**, 224—253.
- Markus, H. & Nurius, P. 1986 Possible self. *American Psychologist*, **41**, 954—969.
- Moretti, M.M. & Higgins, E.T. 1990 Relating self-discrepancy to self-esteem : The contribution of discrepancy beyond actual-self ratings. *Journal of Experimental Social Psychology*, **26**, 108—123.
- Rosenberg, M. 1965 *Society and the adolescent self-image*. Princeton, NJ : Princeton University Press.
- Rosenberg, M. 1986 Self-concept from middle childhood through adolescence. In J. Suls & A. Greenwald (Eds.), *Psychological Perspectives on the Self*, Vol. 3. Hillsdale, NJ. : Lawrence Erlbaum Associates.
- Tesser, A. 1980 Self-esteem maintenance in family dynamics. *Journal of Personality and Social Psychology*, **39**, 77—91.
- 山本真理子・松井 豊・山成由紀子 1982 認知された自己の諸側面の構造 教育心理学研究, **30**, 64—68.
- Wylie, R. 1974 *The self-concept : A review of methodological considerations and measuring instruments*. Lincoln, NE : University of Nebraska Press.

(1991年9月24日受稿)